

田中 皓也

東京外国語大学大学院博士前期課程

要旨

ビルマ語の動詞が持つ意志性に関して、従来の研究では「意志動詞」と「無意志動詞」という2つの分類による記述がなされてきた。動作主体の意志により動作(の開始)が実現する動詞に「意志動詞」、そうでないものに「無意志動詞」という用語が用いられてきた。本発表で、命令形式の有無という基準からは、意志性に関して3分類が可能であることを示す。その後、動詞が持つ意志性によって共起可能性が決まる付属語的な諸要素の存在について言及する。そのような諸要素との関連から、本発表で提案する分類モデルが妥当であることを示す。

1 はじめに

本発表の目的は、命令形式の有無という観点から、ビルマ語動詞の3分類を提案することである。本発表で示す例文は、20代～50代のビルマ語話者5名(うち4名はビルマ語母語話者、1名は非母語話者だが、ビルマ語による公教育を受け、母語話者と同等のビルマ語運用能力を持つと考えられる)に向けた聞き取り調査から収集したものが中心である。一部、自然発話によるもの、発表者が作例をしビルマ語話者にその容認度を確認したもの、ネット上(SNSやメディアなど)から収集した用例をビルマ語話者に確認したものが含まれる。なお、本発表の分類対象となる動詞の数はおよそ1000語程である。ビルマ語語彙研究会(1992)に収録される動詞を基本とし、そこにいくつかの動詞を加え、1000語程のリストを作成し分類対象とした。

1.1 先行記述

従来のビルマ語研究では、動詞が持つ意志性に関して、意志動詞・無意志動詞という2分類で論じられてきた。加藤(2010:47)は動詞の意志性と命令文の関係について、「動詞が単独で命令文になれるかどうかには動詞の意志性(volitionality)が関与している」とし、意志動詞・無意志動詞を判別するテストのひとつとして「補助動詞 *lwè* 『～しやすい、～する傾向がある』と共起するかどうか」というテストを提示している。(1)(2)は、加藤(2010)で示されている例である。意志動詞の *t^hâ* 「立つ」が補助動詞 *lwè* と共起不可なのに対して、無意志動詞の *lé* 「倒れる」が共起可能であることがわかる。なお、例文番号は発表者によるもので、グロスを一部改変した。

(1) **ɲà t^hâ lwè dè*
1SG 立つ しやすい VS.RLS

(2) *ɲà lé lwè dè*
1SG 倒れる しやすい VS.RLS
「私はよく卒倒する」

また、本行(2014)や加藤(2015)なども同様のテストを使用し、意志動詞・無意志動詞という分類を採用している。

2 ビルマ語の動詞並びに命令形式について

ビルマ語の動詞は、法(mood)を表す要素によって標示されることで、動詞述部として機能する。(3)は *t^wá* 「行く」という動詞に、Realis と Irrealis の動詞文標識(“Verb-sentence marker” Okell 1969:118)が後続している例である。

(3) a. *t^wá-tè*
行く-VS.RLS
「(習慣的に)行く, 行った」

b. *t^wá-mè*
行く-VS.IRR
「(これから)行く, 行っただろう」

日本語や英語では形容詞に分類されるような、状態・性質を表す語も動詞文標識による標示を受ける。そのため、ビルマ語では形容詞という独立の語類を立てる必要が無く、動詞として扱われる。

- | | |
|--|---|
| (4) a. káun-tè
良い-VS.RLS
「良い, 良かった」 | b. káun-mè
良い-VS.IRR
「良い, 良いだろう, 良かっただろう」 |
| (5) a. wà-tè
黄色い-VS.RLS
「黄色い, 黄色かった」 | b. wà-mè
黄色い-VS.IRR
「黄色い, 黄色いだろう, 黄色かっただろう」 |

また, ある動詞が特定の名詞と強く結びつき, 単一の意味的なユニットをなす場合がある。本発表の例文中では「名詞 + 動詞」のように, 名詞と動詞の間に + を挿入し, グロスには「名詞 + 動詞」という構造全体の意味を記す。このようなタイプの動詞も本発表の分類の対象となる。(6b) は, sei? 「心」という名詞と, s^hó 「悪い」という動詞が句を成し, 全体で「怒る」という意味で使用されている例である。

- | | |
|---|--|
| (6) a. 動詞 s ^h ó 「悪い」の単独使用例
s ^h ó-tè
悪い-VS.RLS
「(状態/状況/見た目など) 悪い, 悪かった」 | b. 名詞 sei? 「心」 + 動詞 s ^h ó 「悪い」の例
sei?+s ^h ó-tè
怒る-VS.RLS
「怒っている, 怒った」 |
|---|--|

命令形式も動詞述語文の一種であり, 動詞文標識によって表される。なお, (7a) で示される通り, 肯定命令には「音声実態のない形式で理論的に仮定される」(岡野 2007:25) -ø という動詞文標識が使用される。

- | | |
|-------------------------------------|--|
| (7) a. ṭwá-ø
行く-VS.IMP
「行け!」 | b. mǎ-ṭwá-nê
否定-行く-VS.PROH
「行くな!」 |
|-------------------------------------|--|

ビルマ語では, 動詞文標識により命令形式が形成されるが, 全ての動詞に命令形式が容認されるわけではない。肯定命令の容認度が低い動詞も存在すれば, 命令形式が一切容認されない動詞も存在する。

- | | |
|--------------------------------------|---|
| (8) a. ?mê-ø
忘れる-VS.IMP
(忘れろ!) | b. mǎ-mê-nê
否定-忘れる-VS.PROH
「忘れるな!」 |
| (9) a. *pí-ø
終わる-VS.IMP
(終われ!) | b. *mǎ-pí-nê
否定-終わる-VS.PROH
(終わるな!) |

このように, 命令形式の有無という点で, 各動詞に振る舞いの違いが見られる。次節で, この観点からの分類モデルを提示した後, 意志性と命令形式の関連について述べる。

3 意志性による動詞分類

3.1 命令形式の有無

本発表では、動詞が持つ意志性をはかる方法として、肯定命令/否定命令の有無という基準を用いる。ビルマ語の動詞は肯定命令/否定命令の有無に関して、(a) 肯定命令/否定命令ともに容認される動詞、(b) 肯定命令の容認度が低い動詞、(c) 命令形式が一切容認されない動詞の3タイプに分かれる。このことから、次のような分類を提案する。

	タイプ (a) : 意志性 Lv3	タイプ (b) : 意志性 Lv2	タイプ (c) : 意志性 Lv1
肯定命令 「Vしろ」	可	?	不可
否定命令 「Vするな」		可	
例	t ₁ wá 「行く」 pyé 「走る」 p ^h yε? 「壊す」 yáun 「売る」	mê 「忘れる」 sei?+s ^h ó 「怒る」 hnà+c ^h è 「くしゃみをする」 lwán 「懐かしく思う」	pí 「終わる」 pyε? 「壊れる」 cóun 「負ける」 cì 「ある, いる」

表1: 命令形式の有無を基準とする動詞分類モデル

3.2 命令形式と動詞の意志性

ここでは命令形式と意志性の関連について述べる。上述した通り、ビルマ語の動詞には命令形式の有無に関して、3つの異なるタイプが観察された。このようなタイプに分かれるのは、動詞が持つ意志性と命令形式が持つ機能が関係していると考えられる。

肯定命令は聞き手(動作の主体)に対して、意志的に動作を開始することを求めるという機能を負う。(7a)は「行く」という動詞が肯定命令で使用されている例だが、ここでの機能は聞き手に対して「行く」という動作、つまりある地点から別のある地点へと移動する、という動作の開始を求めていると言えよう。ここでは最終的にある別地点への到達が実現するかどうかは必ずしも重要ではなく、主体の意志によって開始することを求めるというのが、肯定命令が負っている機能だと考える。そのため、意志性が高い動詞でなければ肯定命令で使用できない。

一方で否定命令には、(i) 主体の意志によって動作を開始しないように求めるという機能と、(ii) 動詞が表す結果に至らないように意志的な働きかけを求めるという2つの機能があると思われる。(7b)は(i)の機能で使用されている例である。この機能で使用される動詞は、主体の意志によって動作を開始するかしないかという選択が可能である必要がある。言い換えれば、意志性の高い動詞でなければ、(i)の機能を負う否定命令で使用できない。

(i)の機能に加えて、mê 「忘れる」のような、タイプ(b)の動詞が否定命令で使用される際には、(ii)の機能を負う。意志的な働きかけによって「忘れる」という結果に至るのは困難を伴うが、「忘れる」という結果に至らない(≒「忘れない」)ための働きかけは主体の意志によって可能である(メモをとっておく、常に意識しておくなど)。

こうした動詞が持つ意志性と命令形式が負う機能との関連から、タイプ(a)の動詞は最も意志性が高いと考え意志性Lv3とした。一方で命令形式が一切容認されないタイプ(c)の動詞は最も意志性が低いと考え意志性Lv1とした。その中間にある肯定命令の容認度が低いタイプ(b)の動詞を意志性Lv2とした。

3.3 意志性Lv1の動詞と意志性Lv3の動詞との関連について

肯定命令/否定命令が持つ機能から見ると、命令形式が一切容認されない意志性Lv1の動詞は、主体の意志が全く介在できない動詞と見ることができる。つまり、動詞が表す内容の実現(あるいは開始)に、主体の意志が関わらない動詞と言える。ここで意志性Lv1に分類される動詞の例を示す。

(10) 例: 命令形式が一切容認されない意志性Lv1の動詞

káun 「良い」, c^hó 「(外見が)美しい」, sa? 「辛い」, nì 「赤い」, háun 「古い」, ?ò 「年老いている」, nó 「目

覚める」, pyeʔ「壊れる」, yauʔ「到着する」 tɛ̀「死ぬ」, mó+ywà「雨が降る」, cá「聞こえる」, myìn「見える」

意志性 Lv1 には、状態を表す動詞 (性質/外見/味覚/色など) や、局面の変化を表す動詞 (目覚める, 壊れる, 到着する, 死ぬなど) が含まれる。また、主体が想定されない天候・自然現象を表す動詞も含まれている。主体の意志的な動作である「聴く」「見る」に対して、意志性という観点から対立しているであろう「聞こえる」「見える」も意志性 Lv1 の動詞に含まれている。局面の変化を表す動詞のうち、「目覚める」「壊れる」と、意志性で対立する hmó「目覚めさせる, 起こす」と p^hyeʔ「壊す」は肯定命令/否定命令ともに容認される意志性 Lv3 に分類される。加えて、「行く - 到着する」や「殺す - 死ぬ」のように、「ある動作 - その結果」というペアの場合、「ある動作」を表す動詞 (行く, 殺す) は意志性 Lv3 に分類され、「その結果」を表す動詞 (到着する, 死ぬ) は意志性 Lv1 に分類される。

4 付属語的な要素との関連

ビルマ語には主動詞に後続することで意味を加える付属語的な要素が多く存在する。そのような要素の中には、命令形式と同様に、動詞の持つ意志性によって共起できるかどうか決まるものがある。ここでは、動詞の持つ意志性によって共起できるか決まる 4 つの表現を取り上げる。

4.1 -pâ-mè 《意志》

この表現は、動詞に後続し「本人の意志を示す」(大野 2000:366) のものである。なお、この表現は 2 つの要素から構成される。丁寧を表す助詞の一種である -pà が下降調化した -pâ と、Irrealis の動詞文標識である -mè である。ここで Irrealis 以外の標識を用いて *pâ-tɛ̀ (-pâ-vs.RLS) のようになることはない。そのため、ここでは -pâ-mè 全体で「意志」というグロスを付すことにする。この要素は意志性 Lv3 の動詞とは共起可能だが、意志性 Lv1 の動詞とは共起できない。Lv2 の動詞に関しては少数の動詞のみと共起可能という状況のようだ。これは意志性 Lv2 の動詞が表す意味と、-pâ-mè が表す「絶対に～する, 必ず～する」という意味がうまく噛み合わないためだと考えられる。(12)~(13) はどちらも意志性 Lv2 の動詞の例だが、日常世界で「絶対に心配する, 必ず心配する」という発話が生まれる状況・文脈は非常に限られている。意志性 Lv2 の動詞には「心配する」の他、「怒りを露わにする」「悲しい」のように一時的な感情を表す動詞や、「くしゃみをする」「咳をする」など生理現象を表す動詞が含まれるが、このような動詞の多くは -pâ-mè と共起しない。そのため、意志性 Lv2 の動詞とは共起可能性が低いと考えられる。なお、以降の例文では動詞の意志性レベルをグロス中で示す。

(11) p^hyeʔ-pâ-mè
壊す.Lv3-意志
「絶対に壊す」

(12) móun-pâ-mè
憎む.Lv2-意志
「絶対に憎む」

(13) *sóyèin-pâ-mè
心配する.Lv2-意志

(14) *pyeʔ-pâ-mè
壊れる.Lv1-意志

4.2 -mî 《無意識》《不注意》

動詞に後続し、「無意識のうちに～してしまった」「うっかり～してしまった」といった意味を表す。意志性 Lv3 の動詞とは共起可能な一方、意志性 Lv1 の動詞とは原則共起不可能である。意志性 Lv2 の動詞に関しては、多くの動詞が共起可能で一部共起不可能のようだ。共起不可能な動詞としては、(18) で示してる lò「欲しい、欲する」の他、mê「忘れる」といった動詞が確認されている。なお、「無意識のうちに～してしまった」の意味で使用される際には《無意識》、「うっかり～してしまった」の意味で使用される際には《不注意》というグロスを付すことにする。

- (15) sá-mî-tè
食べる.Lv3-無意識-VS.RLS
「食べてしまった」
- (16) ch^háun+s^hó-mî-tè
咳をする.Lv2-不注意-VS.RLS
「咳をしてしまった」
- (17) seiʔ+s^hó-mî-tè
怒る.Lv2-不注意-VS.RLS
「怒ってしまった」
- (18) *lò-mî-tè
欲しい.Lv2-無意識-VS.RLS
- (19) lwán-mî-tè
懐かしい.Lv2-無意識-VS.RLS
「ふと懐かしく思った」
- (20) ɲò-mî-tè
泣く.Lv2-無意識-VS.RLS
「ふと泣いてしまった」
- (21) *nàin-mî-tè
勝つ.Lv1-無意識-VS.RLS
- (22) *pyà-mî-tè
青い.Lv1-無意識-VS.RLS
- (23) dǎdi+yâ-mî-tè
思い出す.Lv1-無意識-VS.RLS
「ふと思い出してしまった」

4.3 -yâ k^hɛʔ 《難易度》

動詞に後続し、「～するのが難しい」という意味を表す。これまでの2つの要素は主動詞に後続する要素であった。この難易度を表す表現では k^hɛʔ 「難しい」が主動詞として使用されていて、「動詞+yâ」が名詞化節のように使用されている。この -yâ という要素は通常、主動詞と動詞文標識の間に生起することで助動詞のように用いられて「～しなければならない」といった意味を表す要素であるが、難易度を表す -yâ k^hɛʔ で使用される yâ とは異なる要素だと考える。ここでは便宜上 ya というグロスを付すことにする。意志性 Lv3 の動詞とは共起可能で、意志性 Lv1 の動詞とは原則共起不可能である。意志性 Lv2 の動詞の多くと共起可能だが、-yâ k^hɛʔ の「～するのが難しい」という意味とうまく噛み合わずに共起不可能な動詞が一部存在する (seiʔ+piʔ 「憂鬱だ」, pyín 「退屈だ」など)。

- (24) t^hwá-yâ k^hɛʔ-tè
行く.Lv3-ya 難しい-VS.RLS
「行くのは難しい」
- (25) pyò-yâ k^hɛʔ-tè
楽しい.Lv2-ya 難しい-VS.RLS
「楽しむのは難しい」
- (26) mē-yâ k^hɛʔ-tè
忘れる.Lv2-ya 難しい-VS.RLS
「忘れるのは難しい」
- (27) *yauʔ-yâ k^hɛʔ-tè
到着する.Lv1-ya 難しい-VS.RLS
- (28) *pèin-yâ k^hɛʔ-tè
痩せている.Lv1-ya 難しい-VS.RLS
- (29) ná+lè-yâ k^hɛʔ-tè
理解する.Lv1-ya 難しい-VS.RLS
「理解するのは難しい」

4.4 -lwè 「～しがちだ、～しやすい」

動詞に後続し、「～しがちだ、～しやすい」という意味を表す。この要素は、加藤 (2010), 本行 (2014), 加藤 (2015) などで、ビルマ語動詞の意志性を判別するテストとして使用されている要素である。加藤 (2010) は、この要素と共起

可能なら「無意志動詞」, 共起不可能なら「意志動詞」と判定していた。なお, 加藤 (2010) と本発表での動詞分類モデルの関係は以下の表の通りである。

加藤 (2010) の分類	「意志動詞」	「無意志動詞」	
本発表の分類	意志性 Lv3	意志性 Lv2	意志性 Lv1
-lwè との共起	不可	可	

表 2

共起する動詞の傾向としては, 意志性レベルが低い動詞ほど共起可能であると言える。意志性 Lv3 の動詞とは共起不可で, 意志性 Lv2/Lv1 の動詞とは共起可能である。なお, グロスは lwe と付すことにする。

- | | | |
|---|---|---|
| <p>(30) *cô-lwè-tè
減らす.Lv3-lwe-VS.RLS</p> | <p>(31) cau?-lwè-tè
恐れる.Lv2-lwe-VS.RLS
「怖がりがちだ」</p> | <p>(32) yô-lwè-tè
減る.Lv1-lwe-VS.RLS
「減りがちだ」</p> |
|---|---|---|

4.5 まとめ

ここまでで, 動詞が持つ意志性によって共起できるかどうか決まる 4 つの要素を取り上げた。諸要素との共起可能性と, 本発表で提案した分類モデルとの関係は以下の表の通りである。

	意志性 Lv3	意志性 Lv2	意志性 Lv1
肯定命令 -ø	可	?	不可
否定命令 -nê		可	
-pâ-mè 《意志》	可	共起可/不可が混在	不可
-mî 《無意識》			
-yâ k ^h ε? 《難易度》			
-lwè 「～しがちだ」	不可	可	
加藤 (2010)	「意志動詞」	「無意志動詞」	

表 3

-lwè 「～しがちだ」以外の 3 要素には, 意志性 Lv3 の動詞とは共起可能な一方, 意志性 Lv1 の動詞とは原則共起不可能であるという傾向が見て取れる。つまり, これらの要素と共起可能な動詞はある程度の意志性を持っている必要がある。この点に関しては, 意志性 Lv2 の動詞と意志性 Lv1 の動詞は振る舞いが異なると言える。4.1~4.3 で示した通り, 意志性 Lv1 の動詞が共起不可能でも, 意志性 Lv2 の動詞は共起可能であるという例が見られた。

なお, 意志性 Lv2 と -lwè 以外の 3 要素との共起可能性に関して, 表 3 では「共起可/不可が混在」とした。どの動詞が共起可能になるかは, 共起する要素によって異なる。そのため, 意志性 Lv2 の動詞グループ内で, さらなる下位分類は不可能であると考え。以下の例を参照されたい。sei?+s^hó 「怒る」と mê 「忘れる」は共に意志性 Lv2 の動詞である。(33) のように, どちらの動詞も -pâ-mè 《意志》とは共起不可能であるが, -mî 《無意識》との共起可能性は異なっている (34)。なお, -yâ k^hε? 《難易度》とは共に共起可能である (35)。

- | | |
|---|------------------------------------|
| <p>(33) a. *sei?+s^hó-pâ-mè
怒る.Lv2-意志</p> | <p>b. *mê-pâ-mè
忘れる.Lv2-意志</p> |
|---|------------------------------------|

